

4. 漢字はこんなに易しい

複雑な字を一回で覚える

この子については、もっと驚かされたことがあります。一年の二学期の終りに、国語の教科書に、「大掃除」とい

う言葉が出てきました。ちょうど十二月の暮れですから、この言葉がよく使われていたわけです。「除」は、当用漢字音訓表にありませんので、「掃除」という使い方は、今では、小学校ではもちろん、中学でも学ばないのですが、社会的にはよく使われている字だと私は考えましたので、「大掃除」という漢字で、この言葉を教えました。

この時、「掃」の「帚」は「箒」で、だから、「掃」は箒を手にする、つまり、「はく」ことだと教えたのです。これは、「掃」という字を印象付けるために教えたのであって、もちろん、「箒」は当用漢字表にない字ですので、一年生に覚えてもらうつもりはまったくありませんでした。

ところが、三学期が始ったある日、ふと思い付いて、私は、この「箒」という字を、黒板に書いて、

「この字の読める人」

と尋ねてみました。もちろん、ひとりも読めなくたって不思議はない、という気持でした。

ところが、多くの子供たちに交じって、あの子が元気よく手を挙げているではありませんか。私は、「おやっ」と思って、すぐにその子を指しました。すると立って、元気よく、

「ホウキ」

と答えたのです。

これには、私はまったく驚いてしまいました。一学期かかっても、一文字のかなも覚えられないというのに、「箒」などという、複雑な形をした字が、たった一回の指導で、どうして覚えられたのでしょうか。

コラム

部首 牛

二本のつのを含む“うし”の頭部を象った象形字。

【物】 牛は家畜の中で最も大きく、庶民にとっては最も頼りになる財産なので“もの(万物)”の代表。

【犧】 “リっぱ”の義と牛との会意形声字。神に“いけにえ”として捧げる牛。

実体と字形の結びつき

結局、これは次のように説明できると思います。つまり、箒の実体は、この子もよく知っている品物です。そのよく知って

いる実体と、「箒」という字形とを結び着ければ、それで覚えられたということになるわけですが、この字形には、箒そのものを連想させる何ものかがあるに違いない……と。

この学習は、「ほ」という抽象された音声と、「ほ」という字形とを結び着ける学習に比べたら、ずっとずっと易しいわけです。この子のように、能力の劣った子供では、「ほ」というような、意味のない音声を頭の中に描くことは、実に難しい仕事なのです。その上、「ほ」という音声と、「ほ」という字形を結び着ける、なんの手がかりもないのです。それは、能力の勝れた子供でも、実に難しい仕事です。

いずれにしても、漢字には一年生の子供にとって、実に覚えやすい何かがあることだけは確かです。それは、どうしても、漢字が、一字で一つの意味を持っているということだと思います。「牛・馬・羊……」、漢字は一字一字が、実体をもっていて、その字を、ちらっと見ただけ

で、すぐに実体が頭の中にきれいに描かれるからです。

「漢字は生きている」私はそう思っています。「はし」では、なんの意味もありません。しかし、「橋」「箸」となりますと、はっきりと、その実体が頭の中に浮んできます。

ところが、かな文字で書かれた「うし」「うま」の場合は、「うしのう」も「うまのう」も同じ字です。こういう文字では、小さな子供たちには、解りにくく、面白みがないのが当たり前です。

これに比べて、「牛」「馬」という字は、生き生きとしているではありま

コラム

部首 馬

馬の全身を横から象った象形字。

【驚】 つつしむ意味の敬と馬との会意形声字。“馬が暴れないようしっかりと手綱をおさえる”こと。馬はからだが大いのに似合わず驚きやすいので、“おどろく”に使われる。

【騷】 蚤と馬の会意形声字。蚤のために馬が体を木にこすりつけたり、体をぴくぴく動かして“さわぐ”こと。“動く”“さわぐ”が本義。

せんか。字が、はっきりとした固有の顔を持っているので、子供たちの目には、とても印象的に写り、すぐに覚えられてしまうわけです。

コラム

部首 羊

二本のつの、長いひげなどの特長を象った象形字。家畜の中でも羊は最も優美で温和なため、「美」「善」を表す。

【義】 “我を美しくする”という意味の羊と我の会意字。つまり立派な人間として必要な資質に対して与えた“徳目”のこと。音はギで、“よろしい”という意味の宜と同じ言葉。